

## 物理的環境について

布川篤史  
(幼稚園教諭)

## 物理的な環境

私は、縁あって複数の幼稚園の保育現場でお世話になってきた関係で、園による保育内容の違いを味わってまいりました。その中で、自然環境、地域のネットワークや人の気質、生活の利便性など、立地の環境による保育の違いに気付いてきました。地域環境が保護者、子どもたちに少なからず影響し、それに伴って保育内容に違いが出てきて、異なる配慮が必要であることにも少しずつ気付かされました。環境に応じた対応も、保育者や施設には必要なことなのかと感じています。そして、子どもの育ちに

環境を慎重に取り入れていきたいと考えています。子どもにとっての環境には、人的環境と物理的環境があると思いますが、ここでは特に物理的環境についての個人的な思いを記そうと思います。

よく、「保育者は子どもの目線に立って……」と言われます。子どもが置かれた立場や状況という意味よりも、今回は、現実的に物理的に子どもが目線に立ち、見てみたところからの、子どもとのかかわりや保育内容を考えてみたいと思います。

## 視覚的な子どもの目線

園生活の中で、子どもたちの興味を、なるべく保

育者の直接的な指示や働きかけが少ない中で引き出していくにはどのようなようにしたらよいでしょうか。

例えば、朝、子どもたちが門をくぐり登園してきた時、子どもの目線の高さから何が見えて、どこまで進むと何が見えてくるのか？ を考えます。その中で、子どもに何を見せたいか見せたくないか、つまり、関心を向けるための環境設定を考えます。母子分離が難しい子どもを抱き取った時、子どもの目線がどちら（母、先生、遊び、友達……）を向くように保育者が歩いたらよいのかを考えると、私の場合は、抱いたまま後ろ向きに進むことがあります。そのように、子どもの目線に留意することを大切に子どもたちとかわかりたいと考えています。

### 視覚により興味を見つけた

仮に、朝の身支度などの必要がなく、すぐに遊び始められるとして。目の前の園庭に、大好きな乗り物が並んでいて、登園して最初に目に入れば、子ども

もたちの多くが飛んでいき、飛び乗ることでしょう。その先に、乗り物の通路が描かれていれば、ついたどつて進んでみたくなります。その先が花壇につながっていけば、咲いた花や実った果実に子どもたちは気付きます。さらにその先に、水道やジョウロが見えれば、「水やりをしたい」という興味が生まれるかもしれません。その間、保育者の直接的な働きかけがなくとも、子どもたちは自発的に興味を持って、楽しみに気付いて取り組んでいきます。さらには、押し花や調理などの活動が用意してあってもよいかもしれません。乗り物遊びが、調理活動の導入になるとも考えられます。もちろん、なかなか予定通りにはいかないことも多いですが……。

そのほか、砂場、鉄棒、保育室……とつながっていれば、それぞれの遊び同士の交わりが期待できるかもしれません。保育者が導きたい活動に、子どもたちが自然な動きの中で自発的に取り組むことで、子どもたちの達成感や自信がより大きくなるのでは

ないでしょうか。

保育室でも、気付いてほしい遊びや、提出物のスムーズな提出などができるような設定を考えることもあります。遊びかけでも別のことに取り組みやすい場や、昨日の続きができる場など、いろいろな場面で、環境による援助や配慮が生まれてきます。

現場の立場から見ると、保育者は、その活動に対する子どもたちへの直接的なかわりの必要性が少なくなつた分だけ、別の人的環境が不可欠な場面に、より深くかかわることができるかもしれません。

## 効果の活用

また、私は、なるべく子どもたちへの禁止事項を押し付けられない生活をつくりたいと考えています。別な点に楽しみを見つけ、関心が向くことで、子どもの行動が変わることを期待して、環境設定を行ってみることがあります。

例えば、積み木やイスを、危険なほど高く積み上げてほしくないという保育者の思いがある場合、あ

る程度の高さに目印の線があることで、子どもたちは、その線に合わせてみたくなることがあります。

乗り物などの遊具の使用範囲や収納なども、わかりやすい表示があることで、はみ出さないように遊ぶゲーム感覚や、所定場所に収めるパズルのような感覚など、子どもたちが楽しんで取り組み、結果的に整理されて、スムーズで心地良いという感覚にたどり着けることが理想です。

そのほか、聴覚などの五感（子どもは大人以上に鋭い感覚を持っていると思います）による刺激は、子どもたちの感情や園生活を大きく左右すると感じています。風鈴や風車を用いて風の質を感じることに、日差しや風向きに応じて子どもが園庭で腰を下ろす向きや位置を調整すること。温度、明るさ、机を引きずる音、不必要な大声など、子どもたちにどのような環境設定が影響しているのか？ 何に気付いてほしいか？ どのような改善ができるのか？ などを意識し、配慮しながら、これからも子どもたちと

共に園生活を過ごしていきたいと考えています。

加えて、保育者は、子どもたちと一緒にいない場面でも、施設、遊具、教材など、さまざまな物（環境）に対して敏感でありたいと思っています。各所の汚れ・劣化、床のきしみ、ネジの緩み、油切れ、物の配置の間違い、動植物の変化などに気付くアンテナ。また、材料、道具、動植物、地域情報やネットワークなど、子どもの必要に応じられる知識や技術をたくさん身につけたいと思っています（特に男性保育者に求められることが多いようです）。そして、子どもたちの育ちのために意味のある環境を整えていきたいと思っています。時には、修繕箇所を保育者があえて直さず、子どもの気付きから一緒に直す環境設定もあり得るでしょう。整え過ぎないバランスの難しさを感じ、大事に考えていきたいと思っています。

子どもたちの充実した園生活のために保育者が果

たす役割の多くは、人的・物的環境を試行錯誤することだと感じています。これからも、さまざまな視点や感覚を磨き、学んでいきたいと思っています。

### 写真にまつわるエピソード

「粘土を使って足型を作ってみる」という活動をする日の朝、ラインパウダーを使って、園庭にたくさん足跡をこっそり描いておきました。子どもたちと騒ぎが広まり、木の茂みの中などへ行つて、怪獣を探す姿もありました。足跡に興味を持ち、木の棒などを使って、地面に自分でも足跡を描いてみる子どももいました。

粘土作りの活動に取り組むにあたり、少しでも「自分の足に関心に向けてほしい」というねらいを持った環境設定でした。

